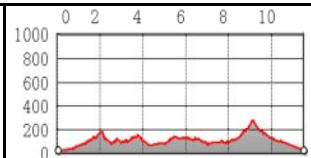


健康登山71:自然歩道39 (美濃津屋駅～養老ノ滝～養老駅)

コース	美濃津屋駅 1.7km/35 1.3km/32 2.3km/33	川原越分岐 1.3km/40 赤岩神社(小倉谷) 2.1km/39 養老駅	東屋 1.4km/34 養老公園通り 1.3km/40	今熊谷 養老ノ滝
水平距離	11.5km		断面図 縦軸: 高度m 横軸: 距離km	
水平換算距離				
累計高低差	登り598m、下り597m			
標準歩行時間	4:13			
実績歩行時間	4:03			



山行報告

山行日 2011・12・01(金) 天候 曇り 参加者 7名

行動 京都駅7:54 大垣駅10:11 美濃津屋駅10:41~10:55 川原越分岐11:43 東屋12:25~13:02 今熊谷13:36 赤岩神社14:04 養老公園通り14:43 養老ノ滝15:07 養老駅16:00 京都駅18:12

記録

養老方面の天気は北の寒気団、南の前線に挟まれた曇天地帯で終日雨に遭わずに歩けた。今回は美濃津屋駅から養老山地の東山麓を北上して、最後に養老ノ滝を見て養老駅まで歩く11.5kmの平坦コースである。大垣駅から美濃津屋駅へ向う養老電鉄の車中から見える養老山地の山々は遅れ気味だった紅葉が進み秋色に染まっていた。

美濃津屋駅から川原越へ向う道を少し登ると養老公園への分岐の道標がある。ここが前回コースとのリレーポイントである。山裾道なので途中にいくつかの谷があり小さなアップダウンがある。地図を見ると津屋集落から今熊谷を越えると若宮集落、次に小倉谷を越えると京ヶ脇集落、最後に滝谷を越えると養老集落となる。滝谷の上流に孝子伝説で知られた養老ノ滝がある。この養老ノ滝が今回コースの最大の見どころである。

リレーポイントから養老公園への自然歩道は良く手入れされた散策道で15分ほど歩くと再び川原越の分岐道標があった。観音様と手書きで加筆されているので観音さんと560.5mの三角点のある尾根道を経て稜線へ通じる道のようなのである。前回、川原越から谷道を下ったが『マムシ・ヒル生息地』の標識がありヒルの被害を受けた。この尾根道を歩く方がよいと思われる。今熊谷の手前に東屋があり昼食をした。今熊谷左俣にはしっかりした橋が架けられていて増水しても心配はない。本流の右俣には橋がなく増水時は車道まで迂回が必要である。

若宮集落の八幡神社前を通って、橋のない小倉谷を渡ると赤岩神社がある。トイレもあり小休止。京ヶ脇集落に入ると道も広くなり、間もなく養老公園に出る。

養老公園は紅葉の最盛期で観光客も多いが、ここで見た紅葉はすばらしいの一語に尽きる。右岸を登り、養老ノ滝で記念撮影をして左岸を下って養老駅へ向った。養老駅着は16時、予定通り16:03の電車に乗れた。

自然歩道 (美濃津屋駅～養老駅)



川原越へ向う
11:18

川原越と養老
方面の分岐
11:58



支沢を渡る
12:19

東屋で昼食
12:53



伊勢湾を見下す
13:10

今熊谷を渡る
13:35



快適な散策道
13:52

赤岩神社
14:10



養老公園の
見事な紅葉
14:52

養老ノ滝で
記念撮影
15:11



名所・旧跡ミニガイド（自然歩道：美濃津屋駅～養老ノ滝～養老駅）

参考資料 ホームページ他より

津屋(美濃)：養老山脈東麓に沿って津屋地内を津屋川が流れ揖斐川本流に注いでいます。

津屋とは、津(川港、入江)に並ぶ^{とま}苦小屋を表現したと考えられています。

関ヶ原方面から桑名に抜ける伊勢街道が津屋川に沿って通っていた。

津屋の名の由来は古くは伊勢湾に^{のぞ}臨む港であったことによるという。

中世から近世にかけて勢至(養老町地名)の^{てつざ}鉄座が栄えたのは津屋の舟運によるという。

舟見、津屋、志津など港の地名と思われるものがあることから、かなり舟運が利用されていたようだといえます。

「平治の乱」で敗れた「源義朝」が、(京都途中越 堅田 琵琶湖 守山) 大垣から尾張に逃げる途中に(養老町明德にある現氏橋から)この津屋川を舟で下ったと伝わる。

「源頼朝(13歳)」もいたが、守山で脱落、美濃で平家に捕らわれている。

*津屋川は養老山の浸食などで土砂が堆積して次第に舟が通れなくなり、川の流れも変わり牧田川と別の川になったそうです。

現在の津屋川は彼岸花の群生地と知られ、堤防の土手一面を3kmにわたり真っ赤に染めます。

美濃津屋駅：養老鉄道養老線の無人駅。大正8年(1919)桑名～養老間で開業。

合併分離を繰り返し平成17年(2007)10/1近鉄線から分離、養老鉄道(新)の駅となる。2008年の乗降人員316/人

岡本太郎画伯デザインの「うさぎマーク」のあるオレンジ色の電車、ラビットカーを見た人は幸せ?になるそうです。

赤岩神社：昔、二頭の竜が化身して巨大な赤岩となり、洪水を防いだという伝説があります。御神体は赤い石。

社殿から更に山奥15分程の所に、奥の院に「赤岩」が祀られています。

この赤岩は巨岩ではありません。1メートル立方ほどらしいです。

石の学名は「チャート」で石器にも使われていました。

養老山地からこの石を持ち出すと悪いことが起こるので、一つ持ちだすとより大きめの三つの石を赤岩神社に返さねばならないようです。

【石器の材質】石器に使われる材質は黒曜石(入手し易く鋭利で加工容易)が90%と最も多い。

次にチャートが7%だそうです。他に夏岩、メノウ、水晶などがあります。

【チャート】二酸化ケイ素(シリカ)からなる硅質の堆積岩で色は、堆積した環境が違いため様々で、赤、緑、淡緑灰色、淡青灰色、黒色などあります。赤は酸化鉄、緑は緑粘土鉱物、黒は硫化鉄。吸着剤のシリカゲルはお馴染。(チャートは旧石器時代からも使われた。緻密で堅い。)

養老公園：養老ノ滝を主にした東西 1800m南北 600m総面積 786,000 平方メートルの、都市公園。四季を通じて楽しむよう自然と芸術、スポーツ施設などを備えた県民の憩いの場です。(関西の「箕面の滝」の雰囲気で大規模版の様です)

養老ノ滝：養老公園内にある落差 32m幅 4mの滝。日本の滝百選。春の桜、秋の紅葉、新緑の季節、雪景色など四季を通じて観賞できます。古今集聞集に出てくる、滝の水が酒になった「養老孝子伝説(後述)」で有名。

菊水泉：霊亀元年(717)元正天皇(女帝)行幸のみぎり、自ら飲浴され「老いを養う霊泉」とされ元号を「養老」と改められた(別項記載)。日本の水百選です。孝子物語はこの水がモデルともされている。水質は、カルシウム、カリウム、マグネシウムなど、ミネラル成分が豊富に含んでいるようです。

養老サイダー：日本で最初に製造されたサイダー。養老公園内にあったが、後継者不在等の理由などで 2000 年 12 月に製造中止。現在のサイダーは養老山麓サイダーといい、別の会社(浦野鉱泉)が、ほぼ同じ方法で製造されているようです。

養老のお土産：瓢箪、ミネラルウォーター、養老豆、そうめん、養老酒、孝子の酒、etc。

その他、*松茸：養老山系南部は古くから優良な松茸の産地で、松茸狩りの観光客が訪れる。

*南濃町の蜜柑：岐阜県唯一の「みかん」の産地。

*柿ラガー：西濃地域の特産品の「柿」を副原料に開発された発泡酒。

孝子物語：鎌倉時代「橘成季」によって編纂された「古今著聞集」(20 巻 700 話)記載された話。(孝子物語は、色々脚色されています)

- 1) 昔、源丞内^{げんじょうない}という若者が、年老いた父親と二人で住んでいた。源丞内は山で薪を取りそれを売って生計とし、父親の唯一の楽しみである酒を買っていた。薪が売れ残る日は米を減らし父親のために酒を買っていた。薪が売れない日が続いたが、源丞内は空腹をこらえて山(多度山/養老山)に入った。

ある日、岩に足を取られ崖下に落ちてしまった。起き上がろうとしたとき、辺りから酒の匂いがした。辺りを見ると滝がありそこから匂ってくる。滝の水をすくって飲むと、体中しみわたる様な美味しい酒だった。源丞内は腰に下げていた「ひょうたん」に滝の水を詰め、一目散に山を下り、家に帰り滝の水を父親に飲ませた。

「これはうまい、今まで飲んだこともない酒だ」父親は滝の水を嬉しそうに飲んだ。源丞内は仕事の帰り必ず滝によって瓢箪に酒を入れて飲ませ続けた。

すると不思議なことに、今まで悪かった目や耳がすっかり治って、体も元気になり、また髪の毛も黒くなってきたという。

この滝の噂はたちまち村中の評判となり、隣村の人達まで酒を汲みに来て病人や老人に飲ませると、体がよくなって元気になったという。

このことが、奈良の帝の耳にも入り、わざわざ滝の所まで行幸され確かめられた。

「これは本当にいい酒だ、年を取った父親を思う源丞内の心が天に通じた。これは天からの賜であるぞ」帝は源丞内の孝心を称え、この滝を「養老の滝」と名づけられ、年号も「養老」と改められた。

そして「父親を大事にするように、この国(美濃)を治めればきっと住みよい国になる」と、源丞内を「美濃守」に任命された。源丞内は帝の言葉通りに孝行と同じ気持ちで美濃の国を一心に治め立派な領主になったという。

2) 霊龜3年9月(717)元正天皇(女帝)は滝の水を見るため、美濃の国に行幸された。

「美泉は醴泉れいせんです。自然の恩恵です。めでたいことです。私も手や顔を洗いますと美しく若返りました。目の不自由な者も良く見えるようになります。白髪も黒々してくるのです」と喜ばれ、その年の11月に年号を養老と改められた。

醴泉れいせん = 中国では太平の世に湧き出るといふ。(醴 = あまざけ)

翌年も元正女帝は行幸されている。

3) 聖武天皇 740年に行幸されている。

大正天皇が嘉仁皇太子時代明治43年(1910)に行啓されている。